

大学出版部のビジネスモデルを求めて——A A U P『持続する学術出版』を読む

山本俊明
(聖学院大学出版部)

大学出版部は「威信のための装置」であり続けるか？

大学出版部の経営の難しさに頭を抱えているときに、脳裏に浮かぶ言葉がある。イエール大学出版局長であったチエスター・カーが大学出版部についてユーモアを込めて語った言葉である。「われわれは最大のコストをかけて最少部数の本を出版する。そしてわれわれは、それに最高の定価をつけ、最低の購買力しかない人々に売ろうとしている。まったく正気の沙汰ではない」。カーは正気の沙汰ではない大学出版部のビジネスが成り立つためには母体大学からの助成が必要であると述べているのであるが、大学出版部は財政的に厳しい制約の中で、マネジメント能力を育成し、学術情報の稀少性と集中化に基づいた学術的価値の高いモノグラフを生み出してきた。大学出版部は学術情報流通の中心にあり、大学出版部の権威と威信が形成されたのであ

る。

しかしデジタル時代に大学出版部は大学の学術情報流通の中心ではなくなった。二〇〇七年にNPO法人イサカが発表した「デジタル時代の大学における学術情報発信（「イサカ報告」）」が記すように、学術情報の発信は大学出版部だけではなく、図書館や情報センターなど新しい担い手が登場した。学術情報の種類は、モノグラフからジャーナル、研究資料またブログなどへと多様化した。オープンアクセス方式で学術情報が無料で提供されるようになった。「イサカ報告」が予告していたとおり、ここ二年に限ってもいくつもの大学出版部がその活動を終えた。

Journal of Electronic Publishing, Vol.13:2, Fall 2011¹⁾、「イサカ報告」の議論を継続して「大学出版部を再構想する」を主題に特集を組んでいる。編者のフィル・ポコダは、編者まえがきで、「デジタル化は、印刷本に基づく学術出版

の多くの困難を取り除いたが、大学出版部から自律と威信を奪った。この特集で大学出版部は学術情報流通の価値あるリーダーであり続けることができるか、あるいはデジタル化の強い波によって人気のない海岸に置き去りにされるのかを考える」という。大学出版部は、デジタル時代に学術情報流通の重要な役割を担い続けられるのか？ 大学出版部は「威信のための装置」であり続けることができるのか？ これらの問いにさまざまな意見がだされ議論がなされている只中の二〇一〇年九月に、デジタル大学出版部として再出発したばかりのライス大学出版局（RUP）の活動停止が発表されたのである。

デジタル大学出版部の登場と活動停止

二〇〇六年に、全出版物をデジタルで刊行することで再出発したRUPの活動停止に対するアメリカの高等教育界の関心が高く、*The Chronicle of Higher Education* (August 19, 2010) の記事とブログ、またブログReading2.0などで、デジタル出版のモデルとなるはずであったRUPがなぜ破綻したのか、その原因について議論が続いた。

RUPでは他の大学出版部と同様、原稿を選択し、専門の研究者による査読を受け、音声ファイルや動画イメージをリンクし、価値ある学術情報に編集して、モノグラフのコンテンツを作成した。コンテンツは、読者の関心を集めるためにオープンアクセス方式（OA）、つまり無料で公

開した。同時に印刷版はプリント・オンデマンド（POD）で販売されたのである。「多くの読者に無料でコンテンツを公開し、印刷版はオンデマンドで提供する」、「在庫の負担がなくなるとする読者に確実に販売する」というデジタル技術を用いた理想のモデルはなぜ破綻したのか。

第一は、ビジネスモデルとして、印刷版の販売でコンテンツ作成費用の一部を回収することを考えていたが、印刷版が期待するほど売れなかったのである。広告としてコンテンツを無料で提供し、印刷版の販売に結びつけるというビジネスモデルが妥当であるか、ということである。

第二は、コンテンツを作成し維持する費用である。RUPは美術史分野のコンテンツを作成しているが、著作権取得費用、また動画イメージなどをリンクする費用、それだけでなく、リンク切れのチェックや新しいコンテンツの追加などの費用が予想以上にかかることである。

第三は、ライス大学のConnectionsという機関リポジトリのサイトをプラットフォームにして、コンテンツの提供とPODを販売した。しかし、刊行点数二十点未満では、読者の注目を集めることもできなかった。コンテンツ販売業者が多くの出版社を集め、多くの刊行点数を購入できるプラットフォームを作るのは「規模の論理」が働くからである。

第四は、母体大学の財政状態が悪くなり、出版局に対する助成金がカットされたことである。もともと大学出版部は大学からの助成を事業継続のために必要としてきたが、

特にRUPのように実験的なデジタル出版をするためには、大学からの助成金が不可欠である。しかし助成金カット以上に問題なのは、RUPの活動停止がキャンパスではほとんど議論されなかったということである。Reading2.0編集長であるピーター・ブランドリーは、ここ数年でいくつもの大学出版部が活動を停止したことに對して「大学出版部を持っているという威信はなくなってしまったのか」と嘆くが、大学出版部が、大学の学術情報流通の中心的担い手でなくなっている現在、「威信」は失われ、大学から大学出版部への助成はますます不安定なものになっている。

『持続する学術出版——大学出版部のための新しいビジネスモデル』

「イサカ報告」をめぐりさまざまな議論がなされたが、大学出版部からのひとつの反論が、二〇一一年の三月に発表された調査報告『持続可能な学術出版——大学出版のた

めの新しいビジネスモデル』Sustaining Scholarly Publishing: New Business Model for University Presses, March 2011（AAUPウェブサイト参照。「AAUP報告」である）。

「AAUP報告」が目指すことは、来るべき十年、つまり印刷からデジタルへの転換期に、持続可能な学術出版はどのようなものか、情報の稀少性と集中化を基盤に成り立っている大学出版が情報の過剰と拡散というデジタル時代に、どのようなビジネスモデルを描くことができるかを明らかにすることである。

まず、大学出版部で現在、実際に試みられているデジタル出版の多様な実験的な取り組みをビジネスモデルの観点から吟味する。その多くは図書館などとの協同事業である。第一のモデルは、OAとPODの組み合わせである。ミシガン大学（八〇〇点）、カリフォルニア大学（五〇〇点）など、数多くの大学出版局が図書館と共同で試みている。印刷本のデジタル化の費用は図書館が負担し、OAで既刊

評説 仏教哲学史

山口瑞鳳

部派仏教や大乘仏教の時代にすでに誤解されていた仏陀の親説を、最古層のテキストから大胆に復元する。

A5判・定価10,395円

語録の思想史

—中国禅の研究—

小川 隆

唐宋時代の禅の語録を精確に解説して、中国禅の思想史研究に新たな方向を切り開いた画期的な研究書。 A5判・定価12,600円

日本語方言形成論の視点

澤村美幸

社会的背景の影響、意味変化の過程、感動詞の方言形成の事例分析を通して、理論構築の課題と方向性を示す。

A5判・定価3990円

市民社会と独裁制

—ドイツ近現代史の経験—

ユルゲン・コッカ

松葉正文、山井敏章 訳

ナチス・東ドイツという二つの独裁制と市民社会との対抗の歴史をたどり、市民社会の本質を明晰に論じる。

四六判・定価2520円

京都三大学

京大・同志社・立命館

—東大・早慶への対抗—

橘木俊昭

学問の町・京都において中心的な役割を果たしてきた三大学の来歴と将来像を豊富なエピソードで交えて示す。

四六判・定価2730円

岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

[定価は消費税5%込み]

http://www.iwanami.co.jp/

本（また品切本）のコンテンツを無料で発信し、PODで印刷本を販売する実験である。このモデルは実験的なものであり、販路の限られた専門書の流通、また品切本の復刊につながり、評価される点もあるが、PODで持続した出版費用をまかなえることはなく、「このモデルは転換期だけに採用できる方策である」。

第二は第一と似ているが、ボーン・デジタル版として制作されたコンテンツをOAで公開し、PODで印刷本を作成し販売するモデルである。RUPの例を挙げたように、コンテンツの制作費をPODで補填することは困難である。例外として、収益を得ているランド研究所の例などを挙げているが、「これらの出版部の発行物には他の大学出版部のような選択と出版による権威が与えられていない」「目的は同じとしてもモデルは異なる」としている。

第三は、ブラットホームをととした電子書籍販売のビジネスモデルである。二つのタイプがあり、ひとつは個人を対象にしたタイプでKindleやiPadなどを通じた販売である。もうひとつが、図書館など機関を対象にしたもので、NetLibraryなどの販売業者による電子書籍のパッケージ販売である。AAUPで調査した五十五大学出版部の八〇%以上がさまざまな販売業者にデータを提供している。大学出版部は規模が小さく、個々の出版部がブラットホームをもつ財政的余裕もなく、販売業者のブラットホームに参加した。しかし、パッケージに占める比率が低いために、収

益は少ないという。

そこで、ここ一、二年で登場したのが、大学出版部など学術出版団体が組織するブラットホームである。ジョン・ホプキンス大学出版局のProject MUSE、JSTOR、オックスフォード大学出版局、など四つか五つのブラットホームが計画されている。これは大学出版部の学術コンテンツの点数を増やし収益を上げることをめざすモデルである。しかしまた事業は準備中であり評価をする段階にない。

第四が、モノグラフ、ジャーナルの形態を越えた新しいフォーマットのデジタル出版である。五十以上の大学出版部がデジタル技術を利用したエンサイクロペディア、地図などの参考図書を作成している。特にこれらのプロジェクトでは、伝統的な学術的価値を保証する査読とデジタル技術を結び付けようと試みている。その中でも補助金を受けずに独立採算を実現している例として、一九九一年にコロンビア大学出版局が図書館、学術情報センターと共同ではじめたColumbia International Affairs Onlineなどが紹介されている。このモデルは、印刷版の場合出版後データがほとんど変化しないことと比べ、デジタル版では、継続的な更新、安全な保存、新しいシステムへのデータの移動などが必要となる。つまり継続して想定以上の費用が発生する。これらの実験的モデルの検討のあと「新しいビジネスモデルに向けて」と題して、学術出版の新しい方向を三つにまとめる。第一は印刷からデジタルに全般的に移行する、

第二はデジタル技術による完全に新しいフォームの出版が出現する、第三は伝統的な有料のアクセスが無料のOAにとって代わられる、というものである。新しいフォームの出版がどのような形態のものか、具体的に提示されていない。むしろ問題とするのが、OAである。「OAは無料ではない。OAを継続できるビジネスモデルとするためには収入源が必要である」「大学、研究者はOAの導入を主張しているが、OAを支援するビジネスモデルが発達しないならば成功しない」と繰り返し、有料のアクセスモデルを破壊することになるOA導入に対して留保が付けられていることである。

「AAUP報告」は、結論としてデジタル時代のビジネスモデルは、まだ現れていないが、「ひとつの新しいビジネスモデルが伝統的な印刷本のビジネスモデルに置き換わるのではない」、多様なモデル、多様な出版物が必要であるという。また「これらの多様なモデルが市場に基づいた収益と機関からの助成金の両方を含んでいる」ことが不可

欠だという。大学出版部が現在も収入の九〇%から九五%を印刷本の販売額に基づいた活動をしている現状から、「一方で伝統的なモデルを維持しながら、他方で実験的ビジネスモデルを立ち上げる」という現状維持的な立場をとる。しかしこの転換期に、これまで、大学出版部が資金的な制約などの厳しい条件の中で、培ってきたマネジメント能力、すなわち、優れた学術情報の選択、編集による洗練されたコンテンツづくり、また大学出版部による学術情報の権威付けは、どのように継承されるのか。情報の過剰、拡散というデジタル時代に「威信のための装置」は回復できるのか。大学出版部が他の出版部あるいは機関と「協同」することの重要性は主張されるが、それらの問いに対する答えは「AAUP報告」の中には読み取ることができない。

沖縄の空白の一年
一九四五—一九四六—
川平成雄著 2940円
奪うアメリカ、戦後なき沖縄の原点、「空白の1年」に迫る！
(本書より)

日本政党史
季武嘉也・武田知己編 150年にわたり政治史に躍動した政党の実態と本質を問い直す。3675円

銅像受難の近代
平瀬礼太著 捨てられ、溶かされ、壊される—。偉人たちの銅像の奇な運命を読み解く。4410円

岩崎彌太郎
幕末明治の立役者！大河ドラマには描かれなかった三度、創業者の実像！
治世の能吏、乱世の英雄
小林正彬著 2625円

岩崎彌太郎
幕末明治の立役者！大河ドラマには描かれなかった三度、創業者の実像！
治世の能吏、乱世の英雄
小林正彬著 2625円

明治維新と横浜居留地
英仏駐屯軍をめぐる国際関係 石塚裕道著 横浜に駐留した英・仏軍の4200日。彼らは日本に何をもたらしたのか？ 2835円

「帝国」の映画監督 坂根田鶴子
「開拓の花嫁」一九四三年・満映 池川玲子著 女性の目線からつくられた「国策」映画の意義を解き明かす。3990円

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格5%税込
PR雑誌「本郷」定期購読受付中

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格5%税込
PR雑誌「本郷」定期購読受付中

学術出版はどこへゆくのか——電子化の新たな動きと日本の課題

林 和弘 (日本化学会)

はじめに

昨年は電子書籍ブームだった。iPad やスマートフォンが社会的にも大いに認知された年であったが、このようなモバイルデバイスが研究者の情報受発信にどのような影響を与えるか、学術出版の世界でも大いに注目された。ブームも一旦落ち着き始めたこれからその真価が問われ、本当に注目すべきフェーズになったとも言える。そもそも、電子書籍のブームは、今に始まったことではないことは様々な切り口で語られてきた。電子書籍デバイスに関しては多くのトライアンドエラーが繰り返されているし、ビジネスモデルとしても欧米の大手学術系出版社では、早くから学術書籍のeBookの配信ビジネスを、電子ジャーナルのサイトライセンスと併存させる形で繰り返してきた。これらは二〇〇〇年代中頃の国際的な学術出版系団体のセミナー

の中心的な話題でもあり、今回のブームは改めてiPadのブームに乗ったに過ぎないという見方もできる。本稿では、今回の電子書籍ブームによって顕在化した新しい電子化の動きについて、筆者の携わる論文誌事業を中心に国際的な動向と共に紹介し、日本の課題について述べる。

これまでの電子ジャーナル

学術情報の収集において電子ジャーナルの利用は当たり前になった。研究者は、Web検索やデータベース検索を行い、必要な論文を読む。精読したい場合は印刷する場合もある。図書館も書庫スペースの問題やビッグデータ購読対応などによって電子ジャーナルへの購読転換を進めてきた。もはやジャーナルは限られた専門家が図書館に通って読むものでは無く、Google検索を通じて誰でも論文単位でその存在を知ろうと思えば知ることができる。ところ

で来た。さらに、論文の引用リンクや、二次情報データベース、引用データベースとのリンクも充実し、様々なルートから論文に到達できるようになった。大学図書館ではデジタル情報資源ツールなどを利用して、所蔵コンテンツへのアクセスの整理に務めている。研究者にとつての情報収集手段は格段に進歩した(図)。

ところが、電子化の観点からみると現在の学術出版の電子化は「本文PDFファイル」に象徴されるように結局印刷相当物の電子化に過ぎない、あるいは、まだ印刷物相当の電子ファイルの影響が大きいと言える。htmlベースの電子ジャーナルが登場し始めた一九九五年頃、「これでページの概念が必要無くなる。」と言われ、ページを一切持たないオンラインオンリージャーナルも検討され、実際いくつかの試みも行われた。しかし、このような新しいスタイルが現在主流になった、あるいは広く定着したとはとても言えない。全文htmlと全文PDFの両方を持つ電子ジャーナル本文へのアクセス数も、未だPDFへのアクセス

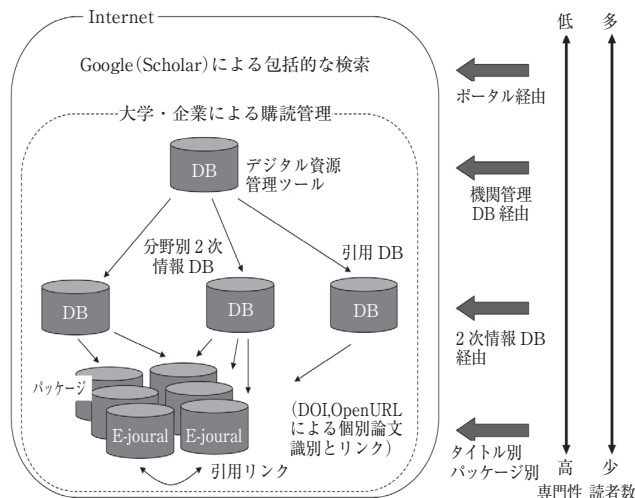


図 電子ジャーナルがもたらした多様なアクセス経路と読者層の拡大

記憶の山荘■私の戦後史

ジャット 食べ物、学校、鉄道やバス…驚くべき想像力と精神力で語る自伝と現代史の融合。歴史家の遺著。森夏樹訳 ¥3150

知の広場

図書館と自由

アンニョリ インターネット時代の図書館の役割は? 図書館再生の名手が示す新世代の図書館創りの要点。萱野有美訳 ¥2940

他者の苦しみへの責任

ソーシャル・サファリングを知る
クライマン他 貧困や圧政など社会的な苦しみへの可視化されない実相を掘り起こす精選論集。坂川雅子訳 池澤夏樹解説 ¥3570

神話論理の思想

レヴィ=ストロースとその双子たち
出口 顯 主著『神話論理』全巻の精読から、キーワード相互のパラ窓的展開を照らし出す渾身のレヴィ=ストロース論。¥3675

ゲーデルの定理

利用と誤用の不完全ガイド

フランセー 誤用の数々を素材に、ゲーデルの定理の真の意味合いと射程を説き明かすユニークな解説書。田中一之訳 ¥3675

スペイン内戦

1936-1939 [全2巻]

ビーヴァー 軍部反乱から代理世界戦争へと拡大した内戦像を一新。欧米で話題の画期的通史。根岸隆夫訳 [上] ¥3990 [下] ¥3780

ドイツを焼いた戦略爆撃

1940-1945

フリードリヒ 戦争犯罪とは? 英米軍の無差別爆撃下ドイツの苦難を描き第二次大戦史を補完。議論喚起の書。香月恵里訳 ¥6930

東京文京本郷 5丁目32-21 みすず書房

tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)
http://www.msz.co.jp

がかなり多いと聞く。これは現在の研究者の多くが紙面やページの概念を望んでいる結果と言って良く、マーケットに合わせている現状を否定するつもりは毛頭ない。そもそも、印刷物相当の電子化が浸透する今に至るまでも、PDFが市民権を得るまでに象徴されるように、様々な紆余曲折と関係者の奮闘努力があった。電子化した結果として紙から離れきっていない現実、電子化と研究者の情報収集習慣の一つの妥協点に落ち着いた結果でもある。しかし、この妥協は新たな保守的観点を生む可能性がある。

電子化の新たな動き

というのも、電子書籍対応とスマートフォンなどのモバイル対応によって情報と紙面との分離が本格的に、いよいよ始まったかもしれないからである。特にスマートフォンのような画面が限られているデバイスに対して、例えばB5・A4相当の本文PDFを見せるのは現実的ではない。また、JOVE (Journal of Visualized Experiments) 誌のように動画専門ジャーナルなど、紙にしようがないジャーナルも発刊され、安定発行段階にある。加えて、PCで閲覧する電子ジャーナルも②誌に代表されるように、タブ形式にすることでアブストラクトや本文を分離するなど、沢山の論文の中から読むべき論文を効率良く見つける工夫が加えられており、そのままでは印刷できない形態のものも増えだした。世代が若くなるにつれて、論文を印刷して

読むのではなく、画面で読む割合が増えていくことも、紙からの離脱を後押しすることになる。

さらに、次世代の電子化は、単に個別のメディアの電子化に留まらず、あるいは、紙、紙面からの離脱に留まらず、他の情報群と連携を取ることを前提としたものとなる。すなわち、学術出版で言えば、例えば、著者を同定するIDの整備や研究費管理データベースとの組み合わせによって、どの機関の誰が、どのような研究費をもらって、その成果はどこで発表され、そのインパクト（電子ジャーナルアクセス数や被引用回数など）がどうなったのか、これらを串刺しにして把握することが、少なくとも技術的には可能などころまで来ている。実際、著者同定については出版社、大学、図書館、学会を含む国際横断的なプロジェクト（ORCID）がすでに立ち上がっている。また、大手の商業出版社やデータベースベンダーは、すでに二次情報データベースと論文データベースに引用解析を組み合わせたものを中心とした情報サービスをシステム化してパッケージングしている。これを研究者のパフォーマンスや研究分野の動向を解析できるツールとし、大学評価や戦略策定に役立つことを売りにして、各大学や政策決定機関に営業をかけている。他にも、論文群の中から図表だけを切り取った情報サービスや、化合物の合成方法だけを抽出し、化学合成を支援する情報サービスも生まれている。紙相当物の電子化によって、電子ジャーナルはまずタイトル単位の流通か

ら論文単位での流通を可能にしたが、そこから先に進んで、図表や、実験項など論文の構成要素単位での流通も可能になって来ているのである。

このようにして、これからの電子ジャーナル出版自体が、もはや独立した活動、あるいは電子ジャーナル間など比較的狭い世界でのリンクに留まらず、より包括的な情報流通システムないしは総合プラットフォームの中の一部として様々な切り口で捉えられていくことになる可能性が高い。次世代の電子化によって、紙からの脱却のみならず、今後の展開次第では学術出版活動そのもののアイデンティティも再考させられる可能性があると言って良いだろう。

日本の現状と課題

さて、このような包括的な研究関連情報サービスがパッケージ化、プラットフォーム化されていく中で、日本の学術出版のプレゼンスはどのように示せばよいのだろうか。残念ながら、日本の状況は先の包括的な情報パッケージを

論じる手前の段階にあると言わざるを得ない。まず、国際的に流通しうる論文データをコストとスピードの両面から効率良く作成できる環境を整える必要がある。例えば、電子書籍、モバイル対応を考える上では、メタデータの重要性和作成のコスト効率化が今以上に重要になってくる。冊子の頃からの工程の延長で紙面作成と共に本文PDFを作成し、そこから改めてXMLなどのメタデータを作成するのは、スピードとコストの両面から不利となる。メタデータを先に作り、それをXML、モバイル、紙面に作り分けることになる。印刷物は無くないとしても、学術出版のワークフローにおいて印刷の工程自体は、これからますます従属化ないしはオプション化せざるを得ないのである。

あるいは論文誌ではWebを利用した電子投稿査読システムから引き続き製作工程管理、電子ジャーナル公開まで一連のプラットフォーム化が進んでおり、いわゆる「人稿」の概念が原理的には著者が査読用原稿を投稿した段階にま

* 第7回配本 *

【宮本常一著作集別集】

私の日本地図6

瀬戸内海II 芸予の海

宮本常一 著

香月洋一郎 編・解説
福山・鞆などの山陽地の沿岸、広島県と愛媛県にまたがる芸予諸島の島々をたどる。写真277枚。◆2310円

ドイツ観念論から ヘーゲルへ

栗原隆 著

キラ星のごとく輩出したドイツ観念論哲学者たちの言説空間を止揚して形成されたヘーゲル哲学のダイナミズムを解明する。◆3990円

デモクラシーと ナショナリズム

アジアと欧米

加藤節 編

21世紀におけるトランス・ナショナル・デモクラシーの可能性を論じたシンポジウムの成果。平石直昭、ジョン・ダン氏ほか。◆3360円

南木曾の 木地屋の物語

ろくろとイタドリ

松本直子 著

山の民の暮らしぶりや心のありようは、ときにフィルターがかけられた視線にさらされてきた。ろくろの木地屋の生涯にせまる。◆1890円

未来社

〒112-0002
東京都文京区小石川3-7-2

tel 03-3814-5521

http://www.mirai-sha.co.jp/

★出版図書目録無料進呈いたします★
※価格は税込

で遡ろうとしている。現在の最も極端な例として気象系の米国の学会誌 *Atmospheric Chemistry and Physics* 誌では、投稿段階で原稿が公開され、公開のまま査読が行われる。そして、査読が通った原稿はサーバー上の審査済みの出版扱いのフェーズに移るだけである。もう少しマイルドな例としては、生物系を中心とした論文誌では、査読が終わった原稿を直ちにPDF化して早期公開としているところと比較的多い。このように、査読と製作の工程が不可分になり、工程管理もwebを前提としたものになる現状に即した出版体制を整える必要がある。

ビジネスモデルに関しても、日本の状況は相変わらず保守的であり、紙を刷り、冊子を売ることを中心としたビジネスモデルから脱却することが難しいと聞く。経営者ではない筆者がこれ以上事業について軽々しく論ずることはできないが、そのような硬直した状況において、慶應義塾大学では大学出版局などと提携して学術書のデジタル化と提供に関する実証実験を開始した。その背景と狙いについては同号の島田氏の論考を参照されたいが、日本にはこのような実証実験、トライアンドエラーを行う仕組みがもっと必要ではないだろうか。少なくとも様子見をしてその大局を掴んでからおもむろに勝ち馬に乗る手法では、主従でいうところの従の位置に甘んじる他ないのはGoogleBooksの昨今の動きとその対応の結果から明らかである。

おわりに

筆者も議論の末席に加わり公開された、日本学術会議からの提言「学術誌問題の解決に向けて―「包括的学術誌コンソーシア」の創設―」では、学術誌の情報受発信問題の解決について議論と提言を行っている。電子ジャーナルの購読と日本からの発信についての諸問題を述べ、解決策を提言している。その議論の背景にあるビジョンは、電子ジャーナルの将来、すなわち新しい電子化への対応であり、その先に生まれる明日の学術情報流通メディアの創出である。本稿はその議論の一端を紹介したとも言える。今の電子ジャーナルが、印刷物相当の電子化物とはいえずに廃れることはないものの、着実にその形態や役割を変えていく。より明示すれば、Pad上で動く絵本を見て育った世代が研究者の中心層になる時の学術情報流通の世界や電子ジャーナルは今と同じものにはならない。そのことを前提とした議論と実証実験の繰り返しによって、特に若い研究者の研究活動とキャリア、あるいは教育を支えることを目的とした包括的な学術情報流通システムの仕組みにどう関わるができるか。この問題意識と具体的な取り組みの繰り返し、学術出版に関わる関係者の生き残りや発展と密接に関わっていると考える。

大学図書館の変化とロングテール

島田貴史（慶應義塾大学理工学メディアセンター）

はじめに

研究や学習のために学術書の電子化は必要だろうか？
まだ、答えは出ていない。慶應義塾大学メディアセンターでは、現在の大学生が学習に使う資料の一つとして、電子化された学術書を必要とするかどうかを確認する実証実験「電子学術書利用実験プロジェクト」を行っている。本稿では、実験に関連するトピック二つを取り上げる。一つは大学図書館の変化であり、実験を計画した理由の一つでもある。二点目は大学図書館のロングテールである。貸出記録からわかる本学図書館の利用傾向についてお伝えしたい。

電子ジャーナルの登場

二〇一〇年はさまざまな意味で「電子書籍元年」だったかもしれない。電子書籍が黒船に例えられることも多かつ

た。黒船は古い秩序を破壊するもの、とした場合、大学図書館にとってのそれは「電子ジャーナル」ではないかと思う。本格的に電子ジャーナルが大学図書館に登場したのは九〇年代の後半である。当初は自然科学、科学技術、医学に関する英文の専門誌とビジネス誌が中心であった。「論文が画面上で読めるか？」「欲しいタイトルがない」という意見も多かったが、DRMの縛りが弱くブラウザとPDFで閲覧できる使い勝手の良さやOpenURL、DOIといった検索や入手効率を高める仕組み、何よりも利用できるタイトル数が紙の雑誌を逆転したことにより普及、定着が進み、ほぼ英文の主要学術誌ならば初号から画面上で読める状況にある。携夷から開国へといった感じであろうか。では、電子ジャーナルは大学図書館にどのような影響を与え、何を変えたのだろうか？

藤原書店

叢書・歴史を拓く(新版)
『アナール』論文選(全4巻)
二宮宏之・樺山紘一・福井憲彦=責
任編集 主要論文をテーマ別に精
選、集成。 完結 各2940~3990円

「沖縄問題」とは何か
「琉球処分」から基地問題まで
藤原書店編集部編 「沖縄問題」
の原点は、「琉球処分」にある。大城
立格/西里喜行/平恒次ほか 2940円

パナマ運河 百年の攻防
1904年建設から返還まで
山本厚子 運河を巡る列強の角
逐を俯瞰し、旧日本軍が企てた爆
破作戦の謎に迫る。 3360円

日本の刺青と英国王室
明治期から第一次世界大戦まで
小山騰 日本の刺青をめぐる歴
史、その流行を通じて西洋との知
られざる関係を明かす。 3780円

ケースブック 日本の居住貧困
子育て/高齢障がい者/難病患者
早川和男=編集代表 安心して暮ら
せる住まいを考えるための必読
書。岡本祥浩=早川潤一=編 2310円

◎我々にとっての劉問題、その意味を問う。
学芸総合誌 季刊 歴史環境文明
vol. 44 2011年冬号
〈特集〉中国の民主化と劉曉波
劉曉波/劉霞/丁子霖/蔣培坤/徐友
漁/余杰/劉燕生/矢吹晋/于安宜邦
/及川淳子/麻生晴一郎/藤井省三ほか
〈緊急寄稿〉「北朝鮮による(韓国)延坪
島砲撃事件の真相」朴一(小特集=横井
小楠)原了圓ほか(書物の時空)粕谷一希
ほか(連載)小倉和夫ほか 3780円

月刊 機
B6変32頁 2月号 №227
岡田晴恵/辻井喬/山
本厚子/佐藤信/中
村良夫/佐藤優/豊
見山和行/加藤晴久/尾形明子/粕
谷一希/山崎陽子/一海知義ほか
年間購読料2000円(送料込) ◎見本
誌・ブックガイド呈 ※表示価格税込
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町523
振替 00160-4-17013 TEL03-5272-0301
ホームページ http://www.fujiwara-shoten.co.jp/

これから起こる変化

四項目の変化はこれからである。蔵書の大半が日本語資料である我が国の大学図書館では少し先の話かもしれないが、電子化が進んだ英語圏の大学図書館では図書館のリノベーションが進行中である。その一つが「書架のない図書館」である。貴重書やオリジナル資料は別として、日常的に利用される資料の多くは元々が複製物(書籍、雑誌)である。では、そのほとんどが画面上でアクセスできるようになった場合、その資料のための書架は必要だろうか? 言い換えると、書庫≡図書館ならば、図書館は今後も必要だろうか? という問題提起が出发点となっている。その解答の一つが学習支援への注力である。紙の蔵書は郊外の書庫へ移管され、不要となった館内の書架が撤去され、パソコン席やグループ学習室、図書館カフェといったスペース

利用者は満足するか? といった視点が芽生え始めている。

れてから図書館に届くまで一か月前後の時間が必要だったが、電子ジャーナルならば全世界同時に利用できる。情報入手法、学術情報の流通の仕方が変わったというのが一点目の変化である。二点目は大学図書館の役割の変化である。電子ジャーナルは契約方式でも紙の雑誌とは異なる。

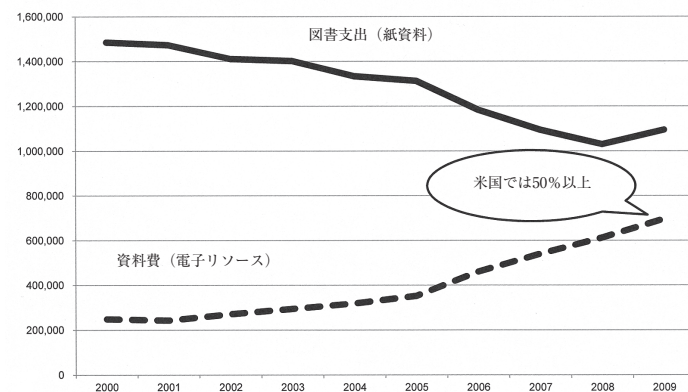


図1 図書館予算の構造的な変化

電子ジャーナルが変えたもの
最大の違いは「アクセスビリティ」である。紙の雑誌の場合、図書館に行かなければ利用できないが、電子ジャーナルは学外の自宅からでも利用できる。これが利用者にとって最大の利点である。また、紙の外国語雑誌の場合、出版国で刊行さ

スに用途変更されている。また、大学図書館が学習支援に注力することは、大学全体のミッションの一つである教育重視とも重なり、大学側からも肯定的な評価を受けている。四つ目の変化は、利用者が日常的に必要とする学術情報をグローバルな基盤の上で安定的に提供することと共に、大学のコミュニティが図書館という場所が必要とするニーズを図書館がサービス化(サービスのローカル化)することだと思われる。

蔵書貸出調査について

それぞれの大学図書館には特徴があり、一括りに述べることは難しい。ただし、幸いにも慶應義塾大学には人文・社会・自然科学・医学に属する各学部があり、他大学と共通する部分も少しはあると思われる。この調査は「どんな資料を電子書籍化すれば利用されるか?」という視点で行われた。厳密さよりも全体的な傾向を捉えることを目的としている。本プロジェクトの実験キャンパスに日吉(文・経・

紙の場合、図書館だけでなく研究者個人(や研究室単位)でも購読することができた。一方、電子ジャーナルでは契約の主体は機関(大学)となる。利用条件等の交渉も図書館と出版社との間で行うため、研究者は「ユーザ」として図書館にリクエストを出す立場となる。この結果、従来は整理や製本という、研究室で購買を決めた雑誌の面倒を見ることが図書館の役割であったが、契約する主体へとその役割が変わってきている。三点目の変化は予算構造である。図1は慶應義塾大学図書館の予算額(単位:千円)の推移である。資料購入の予算には紙の資料を買う予算(図書支出)と電子の資料を買う予算(資料費)の二種類がある。図1の実線が図書支出で、年々減少している。反対に点線である資料費は増え続けている。予算総額が減少傾向にある中で資料費の増加が目立つ。電子ジャーナルが毎年10%前後の値上がりをするに対応してきたことの結果である。このように、大学図書館の予算構造は、確実に紙から電子にシフトしてきている。また、契約する電子ジャーナルの中には、紙の雑誌ではそれほど所蔵していなかったものも含まれている。例えば、冊子では100にも満たない購読誌数であった朝鮮語(韓国語)雑誌は、オンラインで契約することによって2000誌が利用できるようになった。オンライン版を契約した結果、韓国にいる研究者と同じ環境が慶應の研究者にも提供される。電子資料の登場により、図書館側の意識にも投資に見合う価値があるか?

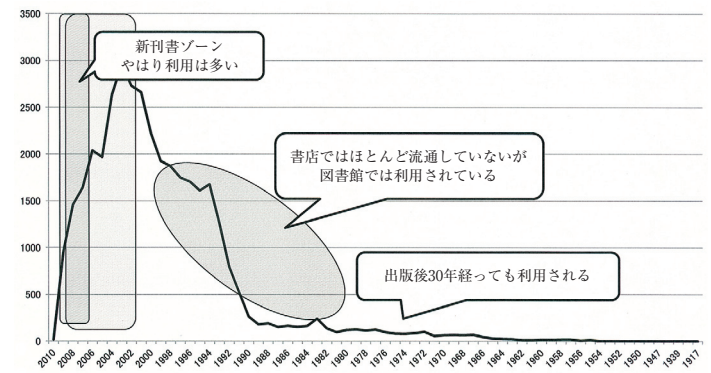


図2 出版年別の貸出タイトル数

な集計法である。集計対象とした資料は全件ではなく、期間中に貸出回数が「二〇」以上の書籍に限定した。図書館資料の場合、貸出中に他の人は利用することができないので、一冊の本が年間に貸し出されるのは多くても八〇一〇回程度である。二〇回以上の貸出ならば、書庫に行っ

法・商・理工・医・薬学部（理工学専門課程）と矢上（理工学専門課程）が選ばれたため、両キャンパスの貸出記録が対象となっている。期間は二〇〇四～二〇〇九年度の六年間である。複数年での動向は把握できるが、出版が調査時（二〇一〇年三月）に近い比較的新しい書籍には不利

でもない資料と言える。

大学生の読書傾向

日吉と矢上の貸出回数上位タイトルを見ると、全体的に自然科学（化学、数学、物理学）や科学技術（工学、情報通信）の専門書が多く、文芸書も数点ランクインしている。主題で見ると日吉では経済、数学、日本文学、化学、法律がトップ5で、岩波書店、講談社、有斐閣、裳華房、東洋経済新報社の書籍の中に二〇回以上に該当するタイトルが多い。矢上では、化学、物理学、電気・通信工学の三つが多く、出版社では丸善、東京化学同人、共立出版、裳華房、朝倉書店の順となっている。大学出版部では、日吉では東京大学出版会と慶應義塾大学出版会が、矢上では東京大学出版会と東京電機大学出版局が上位に入っている。大学図書館が文芸書や漫画を買うなんて、とお感じの方もおられると思う。しかし、村上春樹『1Q84』が教科書指定され、思想系科目や文学、社会学の授業で漫画が副読本に指定される昨今のテキスト事情では単なる娯楽とは言いつけない部分もある。その他では、ビジネス書、自己啓発書や英語（特にTOEIC本）は所属学部に関係なく読まれている。厳しい就職活動が関係しているようだ。また、全体的に理系の学生は文系の本（文芸書、経済・経営書、法律書など）も読むが、文系学生は理系の本をあまり読まない。

大学図書館のロングテール

次にこのデータを出版年で並び変えてみる。すると、大学図書館での書籍の使われ方がよくわかる。図2は理工学メディアセンター（矢上キャンパス）の出版年別タイトル数を時系列に並べたものである。山が高ければ、その年に出版された書籍に貸出回数が二〇回以上のものが多いことを示す。新しい書籍がよく利用されているが、出版後一〇～二〇年経過した資料も堅調に使われている。日吉メディアセンターの場合はもう少し新しい書籍の山が高く、文系学生の方が新しい書籍を好む傾向があるように見えるが、一方で三〇年以上経った書籍も読み継がれている。単体で見ると、特に理系の書籍で品切れ重版予定なしの中に二〇回以上のタイトルが含まれている。図2は少し時間が経過した資料の中にも大学図書館にとってのお宝が含まれていることを示していると言える。この結果を参考に、本プロジェクトで電子書籍化するターゲットは、新刊書にはこだわらず、著作権の保護期間内でよく利用される書籍と定まった。出版から少し時間が経過している本、品切れ重版予定なしの書籍であれば、出版社の販売にも大きな影響がないだろうと考え、このゾーンを中心に出版社への交渉を始めることとなった。

おわりに

本実証実験は、大学図書館が電子ジャーナルで得た経験を参考にして行っている。そこでは、学術情報と電子資料との相性の良さや、待っているだけでは日本語資料が電子化されない現実を学んだ。確かに、図書と雑誌では本質的な違いがあるだろう。また、紙の本が果たしている役割の全てが電子書籍に置き換わると思えない。したがって、論文の使い方に近い、入手のしやすさ、検索性や引用など「情報として使う」部分だけでも電子の世界に持つて行ければと考えている。それでも、紙の本には著者との対話、体系的な知識、手触りや皮膚感覚といった役割が残る。両者の境目がどのあたりにあるかが判明するだけでも実験は成功したと言えるだろう。何より、大学図書館も日本語の学術書が今後も安定的に供給されることを望んでいる。けれども、大学図書館にも潤沢なお金はない。ここに出版社と図書館が知恵を出し合う必要がある。出版社と大学図書館とが出会い、まず話し合うことから始める必要がある。大学出版部の皆様の参加を心よりお待ちしております。

電子ブックと大学図書館——洋書電子ブック利用者の調査から見えるもの

平野圭子 (ケンブリッジ大学出版局)

はじめに

電子ブックは、アマゾンKindleやiPadなどの電子ブックリーダーで読む個人向け電子書籍と、大学や研究機関などが購入する機関向け電子ブックの二つに大きく分類されます。機関向け電子ブックについては洋書出版社の商品を中心に、出版社独自のプラットフォームのものや複数の出版社の電子ブックを一つのプラットフォームで提供するアグリゲーター系のもの (Net Library, ebrary, My Library など) があり、図書館サービスの一環としていずれかの電子ブックの導入を検討する大学は年々増えていきます。ケンブリッジ大学出版局も、二〇一〇年の春に機関向け電子ブックプラットフォームとしてCambridge Books Online (以降、CBO) を発売しました。二〇一一年四月時点で一万一〇〇〇以上の学術専門書を搭載し、今後も毎

月タイトルが追加されていきます。大学図書館や研究者の方々にCBOの案内を行う中で、日本の大学で電子ブックへの関心や期待が高まっていることを感じる一方、電子ブックに対する意識が様々であること、また、導入に伴い大学それぞれに課題があることなどが見えてきました。本稿では、CBOの販促活動を通じて感じた点をまとめ、大学図書館にもたらす電子ブックの可能性について考察したいと思います。

図書館員が考える電子ブックの魅力

冊子体の書籍にはない電子ブックの魅力としてまず図書館の方が第一に挙げるのは、書籍よりも検索性に優れているという点です。冊子体の書籍では索引が唯一の方法であるのに対し、機関向け電子ブックではタイトル内の検索はもちろんのこと、プラットフォームに搭載されたタイトル

の横断検索、さらには出版社プラットフォームであれば大概電子ジャーナルのコンテンツも併せて検索することができ、ユーザーの研究分野や興味に応じて関連項目が探しやすくなるという利点があります。図書館が提供する電子ブックは、通読されるための「本」ではなく、検索して必要な情報を拾う目的で利用される「データベース」としての要素が強いのが特長です。

第二に電子ブックの利点として挙げられるのがアクセスの利便性です。図書館の開館時間に関わらず、環境さえ整っていればいつでもどこでも電子ブックにアクセスすることが出来ます。当出版局の本社担当者によりますと、海外でもこの二年間の電子ブック利用は急速に伸びており、その利用の二五%はキャンパス外での利用とされています。しかし、通常図書館に来館できない利用者を含めた利用増が見込めるというプラスの面を挙げる意見がある半面、図書館の電子化が進めば図書館への来館者の数が減ることを懸念する意見もあり、電子ブックの到来は書籍を所蔵し物

理的な空間を提供する現在の図書館の姿に代わる、新しい図書館の在り方を提示しているのかもしれない。

さらに、書架スペースが節約できるという点や同時アクセス無制限という点についても電子ブックの魅力として認識されています。書架スペースを節約できれば、「ラーニング・コモンズ」など学生にとって有用な場所の提供をすることが可能になると同時に、狭隘対策として電子ブックの購入を検討する大学も増えてくるでしょう。また、同時アクセス無制限であれば、書籍の貸出の状況に関わらず利用することができるところから、テキストブックなど利用が集中するシラバス掲載図書では非常に有効だという意見も聞かれます。

研究者が考える電子ブックの魅力

では研究者の方々は電子ブックについてどう考えているのでしょうか。専門分野により電子ブックに対するニーズに違いはあるものの、大半の研究者が電子ブックについて、

平成22年度吉田茂賞受賞 日本再軍備への道

柴山 太著 ● 1945～1954年 日本はいかにして自衛隊を発足させるに至ったのか。再軍備の治安上の起源も解明。9450円
吉田茂と安全保障政策の形成
楠 綾子著 ● 日米の構想とその相互作用、1943～1952年 5775円

現代経済思想

根井雅弘編著 ● サムエルソンからクルーグマンまで 16人の経済学者の思想と生涯 2940円
経済思想のなかの貧困・福祉
小峯 敦編著 ● 近現代の日英における「経済市民」論「良き社会」を目指して 3675円

産業技術競争力と金型産業

田口直樹著 ● 東アジアにおける比較優位性の要因とその持続への課題を実証的に分析 3675円
日本のものづくりと経営学
鈴木良始／那須野公人編著 ● 現場からの考察 現場の実態を捉え特質と課題を析出。2940円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589
価格税込 <http://www.minervashobo.co.jp/>

教育・研究効果を上げる効果的な媒体という意見を持っています。一研究者の立場としては、複数の書籍の内容を一台のPCに持つことができることや、洋書や絶版書籍など入手しにくいタイトルが入手しやすくなることに魅力を感じ、一教員としては講義の場において、印刷物のコピーのかき集めではなく、電子ブックの情報を簡単にパワーポイントなどの電子媒体に移し、学生に対して効率よく重要ポイントを示すことができるという点、高価な書物の購入を強制するのではなく、必要な章や部分を限定して多数の学生への参照指示ができるという点、ゼミや研究的な授業の場でその都度参照される文献をリアルタイムで学生と共有できる点などが電子ブックの魅力として挙げられています。さらに、物理現象などはカラーの図やマルチメディア機能を加えることで生徒の理解の助けになるなど、今まで書籍では実現できなかった新しい形での講義の進め方に期待を示している意見が多いと言えます。現時点では実際に授業の中で電子ブックが積極的に利用されるにはまだ時間がかかるという意見が大半ですが、必要なICT環境を整えればこうした電子ブックの利用も急速に拡大すると思われる研究者もいます。

選書における課題

様々な異なる販売モデルやコレクションが存在する中、大学図書館にとってユーザーのニーズにあった電子ブックを

効率よく収集するのは必ずしも簡単な作業ではありません。洋書の冊子の場合、書架にずっと置かれたまま使われない場合もありますが、電子ブックの場合はアクセスのあったタイトルを利用統計で調べることができます。そのため、トライアルを実施した図書館にはトライアル期間中の利用統計をもとにし、アクセスが多かったタイトルを中心に選書の参考にして頂いています。研究者が各々の専門分野に基づいて選書するケースもあります。但し、その場合は大学全体で広く使われる電子ブックの収集とは目的が異なるため、図書館としては対象ユーザーのニーズや分野により選書方法を検討する必要があります。ケンブリッジ大学出版局は、今後PDA (Patron-Driven-Acquisition) ^① 利用者主導の選書方法) モデルの導入を予定していますが、日本の大学図書館では、予算管理が難しい等の意見もあり、このモデルがどこまで浸透するかは未だ分からない状態です。

電子ブック購入予算にかかる課題

現時点では、年間の電子ブックの受注量の大半が大学の年度末にあたる年末から三月の時期に偏っています。これは、電子ブックが年間購読ではない買い切り型商品であり、且つ、洋書の場合に懸念される納期の心配もなく、予算消化対策に最適な商品とされているからです。但し、逆を言えば、年間を通じて電子ブックを購入するための予算が充

分に確立されていない現状があります。図書館ごとに予算構成が異なり、ジャーナルの延長としてジャーナル予算を使う場合、図書館の共通資料費を使う場合、データベース予算を使う場合と様々です。また、物としての書籍はこれまで資産として扱うことができましたが、電子ブックはアクセス権を購入するため、消耗品扱いとされるケースも多いのが実情です。電子ブックのための予算が整備されていないため、購入希望があったとしても財務サイドで処理することができず、購入を断念するケースもこの間よくありました。

メンテナンス費用やホスティング費用といった、個々の電子ブックとは別にかかるプラットフォーム維持費も大きな課題となっています。この費用は、当出版局に限らずプラットフォームを保持する出版社はシステム維持費として頂く必要のあるものですが、大学にとっては二年目以降の費用は後年度予算扱いになってしまい、多くの大学で扱いが困難とされています。また、特定の学部や部局ごとに電子ブックを購入する場合、どこがホスティング費用を負担するかということも導入実績が増えるにつれて課題となっています。これら課題を考えますと、電子ブックが冊子体の書籍と同じように自由に購入されるためには、大学の予算体制の見直しが必要になってくると感じます。

電子ブック利用における課題

電子ブックの購入が増えるにつれて、その管理や利用における課題も出てきています。例えば、複数の異なる電子ブック商品を購入した場合、電子ブックの重複チェックはどうするか、また、それぞれ利用インターフェイスが異なるため学生にとって必ずしも分かりやすいインターフェイスではないこと、実体がないので図書館として広報しにくい、ライセンスや著作権への理解を促すのが困難で印刷やダウンロードの制限の周知徹底に限界がある、という意見は多く聞かれます。また、利用を促す手段として、図書館蔵書検索システム (OPAC) に電子ブックの書誌データを取り込み、通常の書籍や雑誌と併せて蔵書検索ができるようにすることが理想とされていますが、多くの日本の大学図書館は国際標準の書誌データフォーマット MARC21 形式に対応しておらず、独自の方法でデータを取り込んだり、ZACIS-CATP MARC 形式からのフォーマット変更作業を余儀なくされています。私ども出版社としても今後、導入までのお手伝いだけでなく、導入後の利用促進にどう貢献できるかが課題となっています。

電子ブックと大学図書館の今後

では、電子ブックは今後どのように利用されていくのでしょうか？ 電子ブックは冊子体書籍に代わるものなので

しょうか？ 雑誌の冊子体が電子ジャーナルへ切り替わった歴史を振り返り、今後のさらなる学術書の電子ブック化に期待する図書館員が多い一方、大学における本当の意味での普及には和書の学術書の電子ブックの普及が不可欠だという意見や、電子ブックがポータブルリーダーに格納され自由に貸出ができるようになる必要がある、という意見もあります。そうした中、レファレンスブックなど検索して利用する出版物の電子版へのニーズは高く、多くの方々が「電子ブックといえはまずレファレンスから」と考えており、今後、新規購入するレファレンスブックはかなりの割合で電子ブックになっていくと考えられます。それに対し、学術書などの単行本については冊子体から電子版に切り替えるというより、電子版における検索機能を活用しながら冊子体で通読をするといった、電子版と冊子体の「共存」が可能であると感じます。また、興味深いのは貸出がほとんどなかった洋書の書籍が電子化されオンラインでアクセスできるようになると、学生による洋書の利用頻度が上がったというケースも聞いています。電子ブックの普及が進めば今まで活用されていなかったコンテンツの利用も促すことができ、貸出冊数に代わり電子ブックの利用統計が図書館の規模を示す新しい指標となるかもしれません。図書館サービスとしての研究・教育の場に電子ブックがもたらす可能性は偉大です。冊子体の書籍では探し出しえなかった新しい研究分野の発掘に期待を示す声もありま

す。様々な面での課題はありますが、個々の大学における環境やユーザーのニーズ、専門分野、書籍の種類に応じ、適切な形での電子ブックの導入および利用が実現できるよう、今後ますます出版社と大学図書館が協力して、新しい図書館の在り方を模索していく必要があると思います。

(1) PDAとは、ある一定期間（典型的には一二月）の間に、特定のアクセス数に達したタイトルを一定の予算枠の中から自動的に購入していくというもので、電子ブックの選書方法としてアメリカで広く利用されています。

大学出版部ニュース

●東日本大震災義援金…三月二五日の常任理事会において、「東日本大震災」義援金五〇万円を贈ることに決定し、日本赤十字社義援金口座に送金した。原発事故終息の見通しも全く見えない中、住民の不安は増すばかり。一日も早い復旧復興を願うのみ。

●二〇一一年度定時社員総会…二〇一一年度定時社員総会は五月二七日に日本出版クラブ会館で開催。四部会・関西支部・事務局の二〇一一年度事業報告と決算、二〇一一年事業計画と予算が審議される。協会活動方針を決める社員総会、積極的な事業計画と活発な議論を期待したい。

●二〇一一年度夏季研修会…二〇一一年度夏季研修会は札幌（北海道大学）で開催される。開催日は八月二五日（木）から二七日（土）。これに先立ち、八月一七日から韓国大田市において第一四回三カ国セミナーが開催される。夏季研修会開催地の北海道大学出版会と三カ国セミナーに当たる国際部会関係者には負担をおかけするが、新たな成果を望みたい。

北海道大学出版会

▼北海道大学O&TEd著『鈴木章ノーベル化学賞への道』（四六判・五〇〇円）
二〇一〇年ノーベル化学賞受賞の鈴木章北大名誉教授の研究や社会へのインパクトを写真や図を使いわかりやすく解説。
▼久末弥生著『アメリカの国立公園法―協働と紛争の一世紀』（A5判・二五二〇円）自然保護法の宝庫・アメリカの国立公園。一九一〇年代から現代までを八つのテーマに分け探求する。

▼菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』（A5判・七五六〇円）北東アジア地域の歴史的動態と諸民族の形成過程を、歴史学・考古学・形質人類学・文化人類学・言語学の側面から総合的に解明。

▼吉田克己編著『競争秩序と公私協働』（A5判・三九九〇円）、吉田克己編著『環境秩序と公私協働』（A5判・三九九〇円）加速する公私協働の動きを解明、新たなパラダイム構築を目指す。

▼高橋芳郎著『黄勉斎と劉後村 附文文山―南宋判語の訳注と講義』（A5判・五二五〇円）南宋時代の判語史料三種の現代語訳・注釈とともに、判語史料の持つ意味を講義する。

弘前大学出版会

▼『EU統合の流れの中で東欧はどう変わったか―政治と経済のミクロ分析―』高橋和・秋葉まり子 著（A5判・一九二頁・定価二二〇五円）一九八九年の体制転換以降東欧諸国が、自らの歴史的過去を背負いながら急速に進むEU統合の流れの中で、その政治的、経済的システムをどのように形成、変化させてきたのか、それぞれの国の社会や仕組みに適合的なものとなり得ているかどうかを捉えようとするものである。その東欧の事例を通して、私たちはどのようにして自国に独自のシステムやアイデンティティを保っていくのかを考えてもらいたい。

▼『白神自然観察園の動物（1）概要編』白神自然環境研究所編 小原良孝・中村剛之 著（B6判・二二頁・定価五〇〇円）園内で頻繁に目にする三五種類の動物の生体写真と暮らしを解説している。
▼『白神自然観察園の植物（1）林床植物編』白神自然環境研究所編 原田幸雄・山岸洋貴 著（B6判・二二頁・定価五〇〇円）園周辺の代表的な林床植物三六種類の解説、紹介をしている。

東北大学出版会

▼正村俊之編『生と死への問い』（四六判・二二四頁・二一〇〇円）

東北大学大学院文学研究科による「人文社会科学講演シリーズ」の第五巻。古今東西の死生観を西洋美術史、日本思想史、英文学、フランス文学、倫理学の専門家が分析する。

文学や美術作品に表現された古代ギリシア人の死生観、墓制の変遷に見出される日本人の死生観など、世界に存在する多様な「生と死」を浮き彫りにする。

▼佐藤利三郎・本村昌文・吉業恭行編著『東北における産学官連携―二十一世紀の東北を考える懇談会の軌跡―』（四六判・二六六頁・一五七五円）

仙台国際センターの建設や東北インテリジェント・コスモス構想の実現など、東北の産学官の連携をはかる場として様々な役割を担ってきた「二十一世紀の東北を考える懇談会」。同会の二十三年間にわたる充実のあゆみを、豊富な資料と関係者の談話から振り返る。

新たな地域社会創出を目指した産学官連携が再び脚光を浴びるいま、その先駆的組織の成功事例を検証する。

流通経済大学出版会

▼『障害者旅行の段階的發展』井上寛著（A5判上製・二四〇頁・三一五〇円）

▼『企業間関係の構造―企業集団・系列・商社―』島田克美著（A5判上製・三六六頁・四二〇〇円）

▼『社会学は面白い！―初めて社会学を学ぶ人へ―』流通経済大学社会学部入門書編集委員会編（B5判・二八〇頁・一五七五円）

▼『貨幣と市場の経済思想史―イギリス近代経済思想の研究―』小池田富男著（A5判・三九二頁・定価四四一〇円）

▼『改訂版』交通学の視点 生田保夫著（A5判・三三〇頁・定価三六七五円）

▼『現代経営管理と経営戦略モデル』宮脇敏哉著（A5判・四〇六頁・三六七五円）

▼『安価な石油に依存する文明の終焉―蘇る文明と社会―』若林宏明著（A5判・三八二頁・三五七〇円）

聖学院大学出版会

▼平山正実編著『生と死の教育』（臨床死生学研究叢書3巻、A5判上製、定価未定）

メモント・モリ（死を忘れるな）という言葉が中世ヨーロッパから伝えられているが、死をどのように迎えるか（言い換えればいかに生きるか）は、ヨーロッパ、アジアなど地域・文化また時代に関わりなく、人間すべての課題である。臨床死生学叢書の第3巻である本書は「生と死の教育」（デス・エデュケーション）の立場からこの課題を論じる。

本書は、第一部臨床における生と死、白土辰子「がん患者の心と身体痛み」ほか、第二部援助者と「生と死の教育」（窪寺俊之「援助者のための「生と死の教育」」ほか、第三部「生と死の教育」の試み（山崎浩司「死生学教育について」）の三部構成。それぞれの分野の専門家による論考であり、臨床、教育に携わる方々に多くの示唆をあたえるだろう。

第一巻『死別の悲しみに寄り添う』（三五七〇円）、第二巻『死別の悲しみから立ち直るために』（四二〇〇円）を発売中。

聖徳大学出版会

▼特別支援教育研究室編『一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援―』（A5判・二二二頁・一六〇〇円）特別支援に関する医学・心理学面の専門的な知識と保育・教育指導の実務に携わるのに必要な内容を網羅する。

▼村井靖児著『音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）音楽療法は心身の病理に対してどのような効果をもたらすのか、音楽はなぜ心を癒すのかを音楽療法の第一人者がわかりやすく解説する。

▼森彪著『医における癒し―人間関係の形成のなから―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）医療現場での症例の紹介とその病氣と闘った人たちと著者との交流を描き人間の交流の必要性を強く訴えかけている。

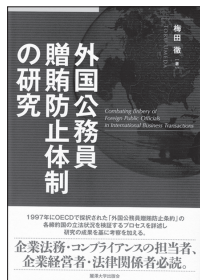
▼高橋大海監修・Jソロイスト歌唱「親子で楽しむ唱歌集」（音楽CD・三四〇〇円）文部唱歌をはじめ、「春が来た」など文化庁「親子で歌いつごう日本の歌百選」にも選定された二三曲を含む全四二曲が収録されている。

麗澤大学出版会

▼梅田徹著『外国公務員贈賄防止体制の研究』（A5判・三三六〇円）一九九七年にOECDで採択された「外国公務員贈賄防止条約」の各締約国の立法状況を検証するプロセスを詳述し、研究成果を基に考察する。さらに、発展途上国に見られる「ファシリテーション・ペイメント」（公務員が少額の支払いを要求してくる慣行について分析する。企業法務・コンプライアンスの担当者、企業経営者・法律関係者必読の書。

▼福田恆存著『福田恆存評論集 二十巻 私の英国史』（四六判・二九四〇円）

見果てぬ興亡を描いて現代日本のための英国史と言える標題作の他、「道徳心恢復の為に」「日本よ、汝自身を知れ」「反核運動の欺瞞」「罪なき者まづ石を投げよ！」など全集未収録作品を収める。



慶應義塾大学出版会

▼小山透著『科学技術系のライティング技法 理系文・実用文・仕事文の書き方』（A5・二一六頁・一四七〇円）雑誌「Pi」編集長を務め、編集者として数々の名著を送り出してきた著者が、理科系の文章の書き方を徹底解説。Latexを用いた表現や、著作権・知的財産権に関しても必須の基礎知識を提供する。

▼『オックスフォード プリテン諸島の歴史第1巻 ローマ帝国時代のプリテン島』（A5判・四二六頁・五〇四〇円）新たな発見により、伝統的な歴史理解とは大きく異なる解釈が続々提示されているローマ帝国時代のプリテン島。前一世紀から五世紀まで、カエサル comes 島から古代の終焉期までのプリテン島の実相を、政治・経済・環境など様々な視点から描く。

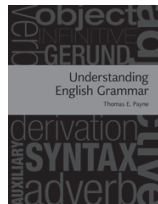
▼大石裕著『コミュニケーション研究 第三版』（A5判・三三二頁・二九四〇円）コミュニケーションが社会の中で果たす役割、マス・コミュニケーションとジャーナリズム、新たなメディアの社会的影響などについて、社会学・政治学・社会心理学等から学際的に検討。最新のデータを盛り込んだ第三版。

ケンブリッジ大学出版局

▼Understanding English Grammar, A Linguistic Introduction

(Paperback 9780521757119 USD 37.99)

文法を丸暗記するのではなく、文法を理解したい、どのように文法が機能しているのかを知りたい人にお薦めのテキスト。何故、英語には二種類の未来形があるのか？何故、限定詞が重要なのか？何故、運動動詞は使うのが難しいのか等が説明されています。クラスで使える問題や著者とコンタクトのとれるWebサポートつき。



▼Quantum Computation and Quantum Information, 10th Anniversary Edition (Hardback 9781107002173 USD 75.00)

量子物理学で最も引用されている本の一つと言われているベストセラーの十周年記念版が出版されました。長年、物理学者に愛読された本書は、量子アルゴリズム・量子テレポーテーション・量子暗号・量子エラー訂正などを分かりやすく説明しています。量子情報の分野では、なくてはならない一冊です。

産業能率大学出版部

▼『新装版マーフイーの黄金律』

しまづこういち著(四六判・一五七五円)

▼『変革期におけるマネジメントの教科書―成果を創る。エネルギーを創る。自分を創る。』

(学) 産業能率大学総合研究所マネジメント研究プロジェクト編著 (A5判・二六二五円)

▼『インテリア1次試験問題集』

産業能率大学出版部編著 (B5判・二五二〇円)

▼『交渉のデザインと実践スキル―合理的な結論を得るためのシナリオとは』

(学) 産業能率大学総合研究所交渉研究プロジェクト編著 (A5判・一八九〇円)

▼『歴史でわかる リーダーの器』

日沖健著 (四六判・一五七五円)

▼『基本からわかる 管理会計』

高橋香著 (A5判・一八九〇円)

専修大学出版局

▼徳田賢二・神原理編『市民のためのコミュニティ・ビジネス入門』(四六判・一六八〇円)

地域社会の再生、活性化、住民の生きがい作りなどをビジネスの手法で取り組む「コミュニティ・ビジネス」を入門編から基礎、実践まで事例を上げながら説く。川崎市と連携して開講されたアカデミーの内容を基にしている。

▼石川和男『わが国自動車流通のダイナミクス』(A5判・四二〇〇円)

近代以降の自動車流通の史的展開を詳細に辿り、各メーカーの動向とマーケティングの状況を分析。日本ではなぜ販売の専売チャネルや複数チャネルが採用されたのか、その実態を詳細に掘り下げて考察する。

▼柴田弘捷・大矢根淳編『中国社会の現状Ⅲ』(A5判・二七八〇円)

急速な経済発展をとげる中国では、片や格差の拡大、社会の分化、コミュニティの解体など問題も生じている。本書は、二〇〇〇年代初頭の中国社会の変容と現状を、「地域」と「生活」に焦点をあてて実証的に分析している。

大正大学出版会

TU選書(四六判)〔既刊〕

▼『般若心経』に見る仏教の世界』小峰彌彦著 定価二二二〇円。

▼『家族の幻影―アメリカ映画・文芸作品にみる家族論』伊藤淑子著 二二二〇五円。家族とは何か。映画や・文学作品の中から探る。

▼『唯識三十頌』を読む』廣澤隆之著 一九九五円(以下同じ)。三十の詩頌から深遠なる心の世界を読む。

▼『対話する宗教―戦争から平和へ』星川啓慈著 公共性など種々の視点を織り込んで宗教間対話を考える。

▼『仏教のエッセンス―ストラスムツチャヤ』を読む』一鳥正真著「ストラスムツチャヤ」の瞑想法の修習

▼『真言密教の世界』小峰彌彦監修。神義孝・本多隆仁編 真言密教の展開を平易に論述。

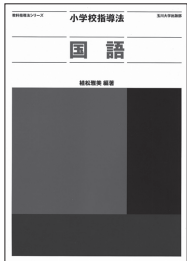
▼『浄土教の世界』小澤憲珠監修 勝崎裕彦・林田康順編 中国・日本における浄土教信仰の展開について論述。

▼『小児科医が語る子育て支援の実際―支援者をサポートするために』中村敬著 子育て支援のアドバイス。

玉川大学出版部

▼『教科指導法シリーズ』全九巻(B5判・各二〇〇―二五八頁・各二二〇〇円)平成二十三年度より全面的に実施される

『学習指導要領』を読み解き、各教科・各領域の指導内容や指導法を提示。いままどのような教科指導が求められているのか、指導要領の改訂点や授業づくりのポイントを解説し、各教科の指導の新しいありかたをデザインする。豊富なサンプル、そのまま授業に生かせる素材も収録。



『小学校指導法 国語』植松雅美編著

『小学校指導法 社会』寺本潔編著

『小学校指導法 算数』守屋誠司編著

『小学校指導法 理科』梅本信一編著

『小学校指導法 生活』寺本潔編著

『小学校指導法 図画工作』渡邊千恵子編著

『小学校指導法 家庭』池崎喜美恵編著

『小学校指導法 体育』金井茂夫編著

『指導法 特別活動』北村文夫編著

中央大学出版部

▼萩原金美著『翻訳スウェーデン手続諸法集成』(二七三〇円)スウェーデンにおける訴訟手続法(民事訴訟法・刑事訴訟法)以外の主要な手続法規(集団訴訟法・仲裁法・行政訴訟法等)に加えて、法・権利実現のために不可欠な法律扶助関係の一連の法律を邦訳し、必要ないし有用と思われる注記を付した。

▼松野良一監修『デジタル時代の人間行動』(二二〇五円)デジタル技術の進展は、人間行動を変容させている。ケータイ、スマートフォン、ブログ、ツイッター、ミクシィ、SNS、facebook、YouTube等のデジタルツールが、人間の社会的身体を形成し拡張させている。デジタル時代を生きる我々の道しるべの一冊。

▼黒田巖著『資本通貨・決済システムと金融危機』(一八九〇円)通貨・決済システムは、現代における最も基幹的な社会インフラであり、繰り返される金融危機は、そのインフラが危ういことを示している。本書は現代の通貨・決済システムとその病理について多面的な考察を行うしつつその本質に迫り、新たな改革の方向を示す。

東京大学出版会

▼『新編 色彩科学ハンドブック (第3版)』(菊判・一七九二頁・四二〇〇〇円)

左の図を見てほしい。灰色の部分は、黒い帯上のものも白い帯状のものと同じ灰色であるが、黒い帯上のもののほうが薄く見えるだろう。ここからもわかるとおり、色とは光の波長の違いとして説明されるが、しかしそれは見る人や素材によって、周りの色や見る人の先入観などによっても異なってくる、様々な要素を持った主観的なものである。

本書は、このように主観的で、つかみどころがない「色」を、物理・心理・生理などの諸側面から解明し、その「色」の写し取り方、画面や紙面への再現の仕方、はたまた製品や建築物への活かし方まで解説した、色(色彩)の理論から応用まですべてが詰まったハンドブックである。カラー図版をふんだんに使用した、色に携わる学生・研究者から実務者まで必携の一冊。



東京農工大学出版会

▼『日本の人口問題と社会的現実 第一巻理論編 第二巻モノグラフ篇』若林敬子著 (A5判 第一巻・三六〇〇円 第二巻・三四〇〇円 (本体価格))

本書は、今年退官する筆者が、四〇年間にわたって行ってきた日本農村社会学、地域人口社会学の視点からの研究・調査を集大成したものである。

第一巻の理論編は、人口・農村・開発・意識・教育にまたがる分野を①少子・超高齢・人口減少社会を突き進む日本の将来②地域開発と人口移動、理由③社会開発とコミュニティ論④人口資質と年齢構造・教育、人口、学校統廃合、一八歳人口の縮小と外国人口、高齢女性論⑤農村における学習、意識、農村生活、家・家族の変化―などテーマ別にまとめている。また第二巻のモノグラフ篇では、農山漁村の九地域について人口減少と限界集落に焦点を当ててまとめている。そのドラスチックな人口変動に地域崩壊していく厳しい実態が見て取れる。



東京電機大学出版局

▼若山芳三郎著『学生のための情報リテラシー』(B5・一九二頁・二三二〇円) Microsoft Officeを活用して情報リテラシーを身につけるテキスト。基本的な文書作成・表計算・プレゼン資料の作成からデータベース、インターネット活用まで、重要な項目を精選し、実践的な例題を手順にそって丁寧に解説した。課題学習型で実力がつく。情報教育の教材や自学自習のテキストに適した一冊。

▼河村尚登著『工学倫理―技術者の行動規範―』(A5・二五八頁・二七三〇円) 本書は、さまざまな事件・事故を参照しつつ、技術者に求められる使命・責任・倫理観を身につけること、さらに技術の正しい発展と社会貢献を進めるための基本的な概念および知識の習得を目的とする。主に工学を学ぶ人々のための指南書としてまとめられた。参照事例は、耐震偽装事件、ウイニー事件、チャレンジャー号爆発事件、食肉偽装事件、JCO臨界事故、特許侵害訴訟、遺伝子スライ事件、森林伐採、臓器移植、放射性廃棄物の地層処分、諫早湾干拓事業など、多岐にわたっている。

法政大学出版局

▼J・L・ナンシー／合田正人訳『限りある思考』(五二五〇円) ハイデガーやデリダの問いを受け継ぐ哲学者が、西洋、犠牲、崇高、ミメシス、愛や共同体について繰り広げる旋律的な思索。

▼大橋完太郎『デイドロの唯物論』(六八二五円) その著作群への鋭利で精密な分析を通じて、唯物論的一元論者としてのデイドロのアクチュアリティを示し、従来の哲学者像を大きく書き換える。

▼山内譲『中世の港と海賊』(三三六〇円) 浦々や港の様相、景観に目配りしながら、中世における瀬戸内海の交通や流通、軍事情勢にかかわった大小さまざまな海賊の姿を描きだす。

▼坂井洲二『伊勢と仏とキリストと』(三三六〇円) ささまざまな経典を読み解き、一神教と多神教の違いを論じつつ、世界に類を見ないかたちで宗教と向き合う日本人の信仰の特質を明らかにする。

▼張玉萍『戴季陶と近代日本』(五四六〇円) 孫文の秘書兼日本語通訳、蔣介石の無二の盟友であった近代中国第一の知日家の見た日本とは? その苦悩と政治活動、思想の変遷を考察する。

東京農業大学出版会

▼『むらと農法変革―「市場モデル」から「むらモデル」へ』磯辺俊彦著 現状求められているのは、それぞれに地域が、独自に農業再生(農法変革)を基本線にしながら、地域の内外からヒト、モノ、カネの流れを活性化させ、地域に内発的な「誇り、幸せ、発展」の起動力、エンジン地域コミュニティとして、創りあげていくことである。改めて、「むら」の歴史的、論理的議論が求められる。平成二十二年十一月(A五・二四〇頁・税込価格三九九〇円)

▼『環境共生学の祖 近藤典生の世界』淡輪 俊著 専門は遺伝学だが、近藤先生の世界は動物、植物、環境問題に至る広範な内容でそれを紹介している。近藤先生は稀にみる非凡な能力を秘めた不世出の学際的研究者。環境の世紀を先取りし、先生の精力的な営為を土台に構築された進化生物学研究所は、環境共生を進める王道を歩み、大学生の教育にも多大な貢献を果たしている。平成二十二年十月(A四変形・一二八頁・税込価格三九九〇円)

武蔵野大学出版会

▼ケネス・タナカ著『アメリカ仏教―仏教も変わる、アメリカも変わる』(二一〇〇円) アメリカに浸透する過程で変容した仏教、仏教の影響で変化したアメリカ。アメリカから仏教を見直す。

▼舞田敏彦著『47都道府県の青年たち―わが県の明日を担う青年のすがた』(二二一〇円) 若者の自殺率が過去最高に。危うく生きづらい青年たちの姿を統計から分析・抽出 都道府県別で比較する。

▼佐藤佳弘著『わかる! 伝わる! プレゼンカーレポート発表も採用面接も怖くない』(一七八五円) 「最後はこのセリフでしめくくれ」とセリフまで教える具体的指導で「初心者実践できる」指南書。

▼浅川公紀著『戦後米国の国際関係』(三四六五円) ルーズベルトからオバマまで、第二次大戦後の十三人の大統領の外交政策を俯瞰する。数々の危機を経た米国と世界の六十余年を振り返る。

▼野田浩二著『緑の水利権―制度派環境経済学からみた水政策改革』(二六二五円) 地球を干上がらせないために水利用はどうあるべきか。米・オレゴン州と英国の事例をもとに水利権制度を考える。

武蔵野美術大学出版局

▼『造形ワークショップの広がり』高橋陽一編（A5判、二六四頁、二二〇〇円）
様々な現場で展開されているワークショップを「造形」の視点から見直したコンパクトな一冊。総論では高橋陽一が、海後宗臣「教育編成論」とドゥモース理論を援用しながら、その重層性を述べる。齋正弘（宮城県美術館）、高橋直裕（世田谷美術館）、降旗千賀子（目黒区美術館）、有福一昭（こどもの城）は、実践現場をそれぞれの語り口で報告。視覚障害者のための美術館については岩崎清が、アートによる障がい理解社会の創生を杉山貴洋（白梅学園大学）が、障害者支援施設での活動を川本雅子が、アートを媒介とした取組とその効用を開示。

教育現場における事例として葉山登（川村学園女子大学）をはじめ、武蔵野美大の教員・三澤一実の「旅するムサビ」、齋藤啓子による「まちづくりにおける創造的な対話」、赤塚祐二の理研展示プロジェクト、最終章では長沢秀之が美術と言葉、自己と他者をめぐり、アーティストの存在理由を問ひかけ、社会と造形のかかわりを考察している。

明星大学出版部

▼『現代社会における教育制度と経営』青木秀雄・岡本富郎著
（A5判・二五六頁・一四七〇円）
制度・経営面から学校教育の課題を考察。
▼『初等教育課程入門——新たな教育課程の原理・編成・評価のあり方を求めて』鯨井俊彦・岡本富郎著
（A5判・二二六頁・一四七〇円）
初等教育段階の教育課程の基礎理論。幼稚園・保育所における教育も取り上げる。
▼『生徒指導—小学校—』味形修著
（A5判・一六二頁・一三六五円）

「命」の大切さを伝え、よりよい社会を作ることにも参画できる児童を育てる活動。
▼『初等国語科教育法』長谷川清之著
（A5判・三三四頁・二二〇〇円）
小学校国語科教育の目的、内容、言語活動、伝統的な言語文化と国語の特質を学び、その背景や指導法の基本を学ぶ。
▼『心の科学—基礎から学ぶ心理学』林洋一監修 本多明生・大原貴弘編集
（A5判・三三〇頁・一九九五円）

関東学院大学出版会

▼山崎稔恵著『芸術と服飾 あやなす景色』（三九九〇円）W・ホガースら西欧近世・近代の作品を中心に、芸術の位相における服飾の形態や人間のこころに映るさまを、「寓意」「エロス」「メディア」「主題」「対話」「技法」の観点から探る。



▼楠木紀男・高島英幸編著『建築の耐震設計』（二四一五円）近年の構造設計は、ほとんど一貫設計構造計算ソフトによっている。建築基準法令や告示に規定されていることも多い。膨大な入出力データによってなされる計算の過程を理解できるように設計例を用いて解説する。



東海大学出版会

▼『日本の鱗翅類—系統と多様性—』駒井古実・吉安裕・那須義次・斉藤寿久編
B5判上製箱入り総一三二八頁（カラー生態写真二四八頁）定価四二〇〇〇円
待望の日本初の鱗翅類総説。迫力の三部構成。チョウ・ガの系統や高次分類について多数の線画や写真を使って詳しく、かつ平易に解説。寄主植物別にガ類の検索も可能に。また、初めて図説された種を多数含んだ幼虫図鑑としても機能する。二四八頁にわたり美しく丁寧にまとめられたカラー生態写真は圧巻。二六名の執筆者が総力をあけてまとめあげた渾身の一冊。

【目次】本書の構成および利用法／第I部形態と生態／第II部鱗翅類の系統と高次分類体系／第III部日本産鱗翅類の多様性／図版・文献／索引（学名・和名・事項・寄主）



名古屋大学出版会

▼『デジタル時代の日本映画—新しい映画のために—』ミッソ・ワダ・マルシアノノ著（四八三〇円）いま何が生じているのか？ 映画文化の現在を捉える。

▼『日中国交正常化の政治史』井上正也著（八八二〇円）激しい外交闘争と和解の模索の両面から日中の外交政策を捉え直し歴史的交渉の新たな全体像を描く。

▼『就社』社会の誕生—ホワイトカラーからブルーカラーへ—菅山真次著（七七〇円）新卒就職・終身雇用を常識としてきた社会はいかにして生まれたか。

▼『現代イスラーム金融論』長岡慎介著（五〇四〇円）イスラーム学と経済学を横断し、グローバル化するイスラーム金融のダイナミズムを捉えた本格的な研究。

▼『国際移民の時代「第4版」』S・カールズ／M・J・ミラー著 関根政美・関根薫監訳（三九九〇円）ますます深まりゆく移民社会化の行方を見通した、もっともスタンダードな概説書の最新版。

▼『太陽地球系物理学—変動するジオスベース—』國分征著（六五一〇円）太陽と地球を取り巻く環境の、構造とダイナミクスを第一人者が解説。

三重大学出版会

▼『現代中国とモダンニティ—蝙蝠のポレミク』代田智明著（A5版三三〇頁）
まえがき／I 歴史認識1「半日」から「反日」へのことば／2 孫歌「アジアを語ることのジレンマ」に対する応答／3 北京における対話—ナシヨナリズム談義／4 語らぬこと・語ること・聞き取ること／5 スエとなる覚悟について／II 地域文化研究／1 溝口雄三「中国の衝撃」に対する応答／2 加々美光行編「新しい中国の発見」に対する応答／III 文化・思想1「中国二〇世紀文学を学ぶ人のために」に対する応答1／2 宇野浩洋「克服・拮抗・模索」と坂井洋史「懺悔と越境」に対する応答／3 溝口・池田・小島「中国思想史」と中島隆博「残響の中国哲学」に対する応答／4 思想の非男性的理解について—丸山昇試論—／V 魯迅論と近代の主体1 魯迅 危険な思想家、救済の文学者／2 竹内好・魯迅論の奥行き／3 孫歌「竹内好という問い」に対する応答／4 魯迅論と個の自由な主体性について—伊藤虎丸をきっかけにして—／あとがき

京都大学学術出版会

▼地域研究叢書22『都市を生きる人々』
遠藤 環 著（四二〇〇円）グローバル化の進展と不安定性の増大。バンコクでの二つのコミュニティ調査から、リスク時代を生き抜く人々の潜在力を「居住」と「職業」に着目しつつ鮮やかに描き出す。

▼『アフリカ地域研究と農村開発』伊谷樹一・掛谷 誠 編（四九三・五円）「アフリカの停滞」とは本当か？ 大規模なフールドワークからその自然・社会構造をあぶり出し、その特性・最小生計努力と平準化傾向を生かした「アフリカの発展」を目指す、地域研究からの開発アプローチ。グローバルズムに対する、地域からの、実践的・学問的反響。

▼『中国訴訟社会史の研究』夫馬 進 編著（二〇〇八〇円）歴史時代の中国社会には、民事紛争を解決する法廷がなかったとされている。こうした誤った理解を払拭するために、日中の代表的な研究者が、おびただしい文献資料を渉猟しながら、各時代における政治・経済・市民生活と訴訟との関連を明らかにする。

大阪経済法科大学出版部

アジア研究所は主に東アジアを中心とする学術的交流・発展を通じて東アジアの平和と繁栄に貢献することを趣旨として創設され、内外の大学、研究機関との国際シンポジウムを共催するなど、協力関係を築いています。そのアジア研究所研究叢書の既刊書から二点を紹介します。

▼『東アジア政治・外交史研究Ⅰ「間島協約」と裁判管轄権Ⅰ』白榮助著（四四一〇円）一九〇九年に日本が清国と締結した「間島協約」と間島地方の朝鮮民族をめぐる日中両政府の交渉過程を検討することによって、当時の日中両国の政策判断と居住朝鮮人の動向を明らかにしようとしたものである。

▼『大國の攻防Ⅰ世界大戦における日ソ戦Ⅰ』A・コーシキン著・佐藤利郎訳（四八五〇円）ソ連とその同盟国たる米英両国が太平洋戦争にいかなる対応を取ったか、また、ソ連が第二次世界大戦中对日政策および軍事戦略をどのように展開していったかを分析する。
▼お詫び『未来を発信する八尾・環山楼市民塾』は四月刊行になりました。

大阪大学出版会

▼廣川和花『近代日本のハンセン病問題と地域社会』（A5・三九九〇円）「絶対隔離」の再検討を通して病者の「生存」の多様さと悲慘さを社会史としてとらえ直す。

▼桃木至朗『中世大越國家の成立と変容』（B5変・九九七五円）中華帝国の支配から自立した「李陳時代」、北部ベトナムがどのような変化を経験したか。

▼濱村真理『前頭葉性認知障害をもつ人の談話分析』（A5・六三〇〇円）認知療法士である著者が、障害を発言、行動から明らかにし、理解のあり方を提唱。

▼石部尚登『ベルギーの言語政策Ⅰ方言と公用語』（A5・六五一〇円）独立以来「言語戦争」といわれる二言語対立への政策と多様な方言への言及。

▼井上さゆり『ビルマ古典歌謡におけるジャンル形成』（A5・六七二〇円）創作技法とプロセスの分析により、歌謡のジャンル形成過程を明らかにする。

▼矢澤信雄『政策形成のためのライフサイクル・コストイング』（A5・三七八〇円）電力の技術開発を中心に計量的評価方法を提案し、その有効性を示す。

関西大学出版部

▼井上 宏著『笑いの力／笑って生き生き』（四六判・二四七〇円）現在の閉塞感を突破していくには、個人と社会の元気が必要だ。自分を笑い飛ばし、未来への新しいエネルギーを汲み出す「笑いの力」を認識しなおし、その効用を訴える。

▼高橋隆博著『街道をあるく 大和の美と風土』（四六判・二二〇五円）仏と神たちの微笑みと哀しみ、人びとの息づかいを訪ねる奈良・大和路の古道巡礼。風の音、山河のささやきに耳をかたむけ、「日本ふるさと」大和の美と風土をさぐる。

▼竹下公視著『現代の社会経済システムⅠ社会システム論と制度論Ⅰ』（A5判・三六七五円）混迷する現代の経済社会を根底からトータルに捉える視点を提示。その特徴を歴史的・構造的に解明すること、新たな社会経済システムの方向性を第三のモデルとして提案する。

▼吉田栄司著『憲法的責任追及制論Ⅱ』（A5判・五〇四〇円）憲法上複数の責任概念を設定する著者独自の「責任追及制論Ⅱ」。国民代表制・議院内閣制・違憲審査制等の憲法上の諸制度に関する憲法解釈論を展開する。

関西学院大学出版会

新刊
▼中島暢美著『ディブリーフィング・ワークの研究Ⅰ看護学生の臨地実習におけるディブリーフィング・ワークの心理教育的意義』（A5並製・一八〇頁・定価二一〇〇円）

▼関西学院大学総合政策学部編『卒業生が語る総合政策Ⅰ関西学院大学総合政策学部の15年を振り返って』（A5並製・一六〇頁・定価九四五円）

▼白石壮一郎著『文化の権利、幸福への権利Ⅰ人類学から考える』（A5並製・七四頁・定価一一五五円）人類の幸福のため人類学はどう貢献するのか

▼石原俊彦・山之内稔著『地方自治体組織論』（A5並製・二一六頁・定価二二一〇円）組織マネジメントの視点、法制度による枠組みの視点に共通する首長部長の組織編成に焦点を当てて考察。

▼八木克正・神崎高明・井上亜依著『Phrasology, Corpus Linguistics and Lexicography: Papers from Phrasology 2009 in Japan』（A5上製・二二二頁・定価三七八〇円）

九州大学出版会

▼森平雅彦・岩崎義則・高山倫明編『九州大学文学部人文学入門Ⅰ 東アジア世界の交流と変容』（A5判・二二〇〇円）紀元前から二十一世紀に至る東アジアの社会と文化の諸相を、人文学の様々な分野から多角的に考える。九州大学文学部教員による最新の研究成果を社会に還元する統合型テキストシリーズ第一弾。

▼宮崎麻子『ローマ帝国の食糧供給と政治Ⅰ共和政から帝政へ』（A5判・四八三〇円）食糧供給問題をテーマに共和政末期から帝国初期における統治構造の変容を論じた、画期的ローマ共和政政治史研究。

▼谷隆一郎『アウグスティヌスと東方教父Ⅰキリスト教思想の源流に学ぶ』（A5判・三三六〇円）西洋精神の礎である教父たちの文脈に即して、人間、自然、神をめぐるテーマを吟味・探究する。混迷を深める現代に新たな知の地平を開く。

▼富田忠雄・長塚朗・瓦林達比古『ヒトの一生の生理学Ⅰ生から死まで』（B5判・三三六〇円）ヒトが生まれ、発育し、成長し、次世代に遺伝子を伝え、老化して死を迎える過程を生理学的に述べる。